

国内ロングステイの推進に向けた考察

—北海道と釧路市の取り組みを事例として—

2020年現在、新型コロナウイルスによって旅行業は大きく衰退し、私たちの旅行形態は大きく変化する年となった。そのような中、注目されたのは国内ロングステイである。場所を問うことなく仕事や学業に就くことができる今現在、新しい旅行の形として大きく注目を受けたのである。本論文では、定義の先行研究と北海道の事例研究を行い、新しいロングステイの概念を提示する。今の時代に求められる新しいロングステイを見出すことにより、より旅行が身近になって様々な体験ができるようにすることを望むものである。

【キーワード】

ライフスタイル 滞在 滞在スタイル 効果・効用 魅力 ちょっと暮らし
気候

序論

2020年新型コロナウイルスにより、海外旅行はもとより、国内旅行もままならない状況になった。旅行は厳しいものとなってしまい、人々は移動することを制限されることを余儀なくされてしまったのだ。そのようななか、注目された旅行が国内ロングステイである。

2019年11月7日、ロングステイ財団（1992設立）はロングステイに関する最新動向を集計した「ロングステイ調査統計 2019」を発表した。まず、2018年の出国日本人数は、1,895万人で、過去最高数を記録した。その中でも日本人の海外ロングステイ人口（推定値）は過去最高の162万3,000人（前年度比0.8%増）となった。

現在のところ、政府関係省庁によるロングステイの人口に関して、統計は存在していない。この数字は出入国管理統計¹によるものであり、滞在目的は問われていない。よって高校や大学といった教育機関の留学生や中長期現地滞在者も含まれている。そんな中でも海外に比較的長期にわたって滞在する人数は年々増加傾向にあり、日本人の長期海外志向は高まっているように見受けられる。

一方で国内ロングステイはどのように推移しているのであろうか。同調査によると、2018年の国内ロングステイ推定人口は、773万8000人（前年度比9.0%減）であった。また、観光庁「国内・旅行消費動向調査」によると、2018年の宿泊を伴う旅行者数は2億9,105万人（前年度比10.0%減）であった。

図表1 ロングステイ推定人口の推移

（単位：万人）	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
総国内旅行 (宿泊を含む)	31,753	31,356	31,555	32,042	29,734	31,299	32,566	32,332	29,105
ロングステイ 推定人口	879	831	758	757	721	846	769	850	774
6泊	469	376	367	306	396	395	363	414	306
7泊	357	328	232	254	234	269	229	289	289
8泊以上	639	682	664	702	573	747	690	713	695
計	1,465	1,386	1,263	1,261	1,203	1,411	1,282	1,417	1,290

出典：観光庁「2018年 旅行・観光消費動向調査 年表」をもとに筆者作成

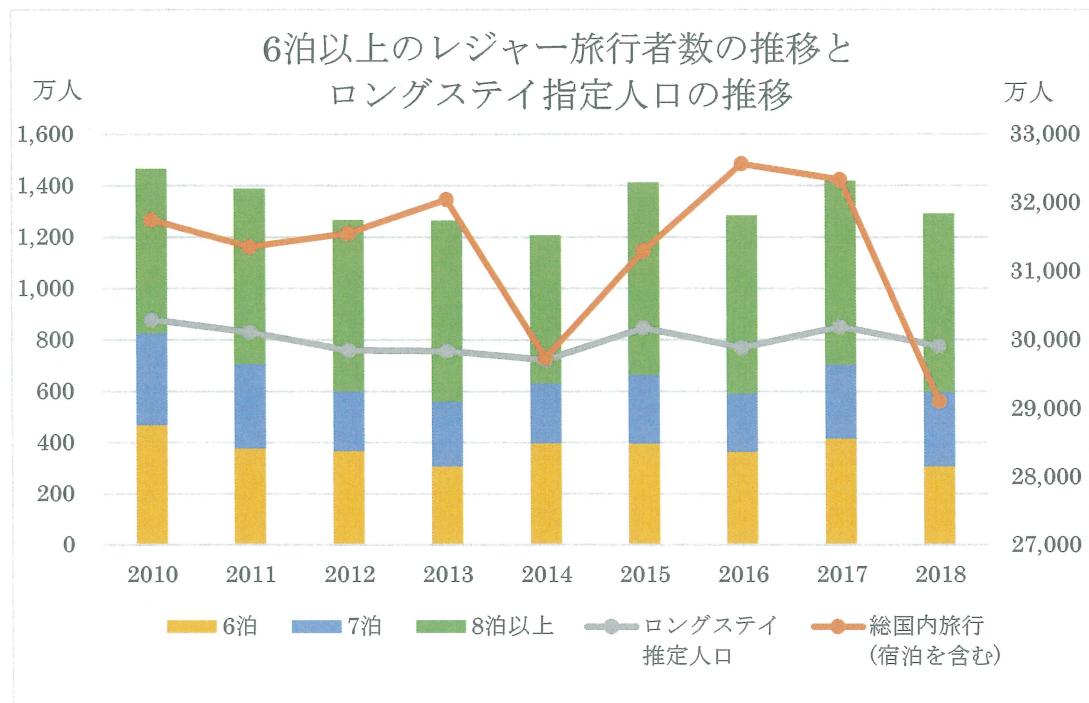
図表1、は2010年以降の宿泊を伴うレジャー市場およびビジネス市場の交流人口合計とロングステイ推定人口を推移したもので、図表2はそれらをグラフ化したものである。なお、ロングステイとは国内においては7日以上の滞在をすることである。定義に関してはのちに1章に明確に記載する。この年は、7日以上の滞在（=6泊以上）でビジネス以外の人数は1,290万人であった。グラフを見てもわかる通り、日本人の海外ロングステイは関心

¹ 2018年 出入国管理統計/出入（帰）国者数

が高まってより伸びてきているが、国内ロングステイはここ 10 年では大きな変化はなく、実際に伸び悩んでいるものが現実なのである。

そんなロングステイだが、先述した通り一定期間滞在するために現地ではお金を落とし、また地域交流の 1 つとしても注目されている。オンライン授業、テレワーク、リモートワーク等今現在急速に普及する新しい生活に関して並行して推進していくべきツーリズムなのではないだろうか。

図表 2 ロングステイ推定人口の推移



出典：「ロングステイ統計調査 2019」を元に筆者作成

本論文では、ロングステイを促進させるために、地域が官民一体となって取り組んでいくことが重要課題であること、ロングステイの新たな機会の提言をすることを目的とする。そのために、定義の先行研究と北海道の事例研究を行い、新しいロングステイの概念を提示する。今の時代に求められる新しいロングステイを見出すことにより、より旅行が身近になって様々な体験ができるようにすることを望むものである。

第一章 ロングステイの現在

本章ではロングステイの概念について整理するものである。

1-1 ロングステイの認識

“ロングステイ”とは、財団法人ロングステイ財団の登録商標である。また、同財団は国内ロングステイの言葉の意味合いとして以下のように定めている。

主たる生活の拠点のほかに、日本国内の他の地域にて比較的長くあるいは繰り返し滞在し、その滞在地域のルールを尊重しつつ地域文化の触れ合いや住民との交流を深めながら滞在するライフスタイル

私が特に注目すべきと提示するのは「他の地域に比較的長く滞在」する点と、「地域文化の触れ合いや住民との交流をふかめ」るという点である。短期的な滞在ではなく長期的に滞在することは、物の豊かさよりも心の豊かさに重きを置いて生活することが必要不可欠である。いかに現地にて自分自身の気持ちが納得できる滞在をするか、地元と違う環境にどれだけなじんで生活をするかという点が極めて大きい。2点目の地域文化の触れ合いや住民との交流という点において、これは買い物を通じてお金を落とすという経済面の関わりもあるが、実際にはどれだけ意義を見出せるかということを求めているのではないだろうか。これに関しては後に意義という点でまとめていきたい。

1-2 ロングステイの定義

財団法人ロングステイ財団が定めた定義によると、以下の5点を定めたものがロングステイであるとしている。²

図表3 ロングステイの定義

1	比較的長期にわたる 滞在である	海外においては「永住」ではなく、日本への帰国を前提とした滞在型休暇とし、国内においては本来の住居とは違う地域に比較的長期に渡る滞在であることとする。海外ロングステイにおいては2週間以上、国内ロングステイにおいては1週間以上とする
2	「移住空間」を保有 または賃借する	生活に必要な設備が整った宿泊施設または適切な住まいを保有または賃借していること
3	「休暇」を目的とする	仕事から解放されて自由な時間を過ごし、現地の人々との交流活動等を行うこと。語学研修や各種文化活動への

² ロングステイ統計調査2019 p6 ②

		参加、ボランティア活動等を指す
4	「旅」よりも 「生活」を目指す	「異日常空間」における「日常的体験」と捉える
5	生活資金の源泉は日本 にある（海外） 生活資金の源泉は自宅 にある（国内）	主たる生活資金の源泉は日本または自宅にあり、現地での労働や収入を必要としないものである。

出典：ロングステイ統計調査 2019 より筆者作成

以上5点が、ロングステイの定義である。全部に共通するが、あくまでも一時的に海外にてまたは、生活地域以外にて余暇を楽しむものであり、決して永住権の取得や住民票の移動をするほどなじみこむものでもなければ、ただ、黙って何もしないのびのびとした余暇でもない。あくまでも、生活するうえで必要なことを提示しているものであるだろう。無論、ほぼ同様の内容が日本国憲法にて保証されており、二十五条では「すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する。」³と明記されているため、海外においても生活地域以外においても同等の生活を送る必要があることがわかる。

一方で、2020年に突如として世界を震撼させた新型コロナウイルスにより、テレワークの推進やリモートワークといった、場所を問わずして仕事をすることが多様化されて、仕組みとしては社会に浸透してきたといえよう。一定期間、自宅を離れて仕事をすることも立派なロングステイといえるであろうと筆者は考える。がしかし、ロングステイ財団の定めた定義には3つ目に「休暇」を目的とするとしている。現地にて仕事時間は仕事をし、仕事後における休暇をロングステイに含めることはできるのであろうか。ここにおいてはロングステイの定義を再考案する必要があると感じるばかりである。

1-3 ロングステイの効果・効用

ロングステイには様々な滞在スタイルが多様なこともあります、必ずしも同一なことが行われるものでもない。その中でもロングステイ財団は8つのロングステイの型があるとし、それぞれ効果・効能があるとしている。⁴

①キャリアアップ型ロングステイ

参加形態は個人が多く、年齢層が幅広い。文化交流の手段として最初に「語学」習得を目指すケースや趣味・特技を本場で習得するケースもある。最近は、グローバル化に備えて資格取得を目的としたロングステイも多い。異日常経験により、新たな発見があり、自分自身の知識やキャリアの向上、さらには人間性の醸成、人生の広がり方が期待できる効果がある。

³ 日本国憲法第25条

⁴ ロングステイ統計調査 2019 pp6-7

②ファミリー同伴型ロングステイ

参加形態は、家族、親子3世代、祖父母と孫の3種類が一般敵である。母子、孫との留学、要介護介助の家族とのロングステイなど、様々な形態が生まれている。異日常空間で過ごすことにより、新しい家族関係の発見や、普段では得難い体験を通して、お互いの信頼関係の醸成を図ることができる。また、要介護の場合には、家族の肉体的、精神的、経済的負担の軽減にも通ずる。

③ボランティア活動型ロングステイ

これまでに培ってきた経験や特別な技術を持っている人が、海外や地域などに出向き奉仕活動を希望する場合は、ロングステイと位置付ける。参加形態としては、シニア層が一般的に多く、定年後の新たなライフスタイルとして希望する人が多い。自分自身のモチベーションの向上や、やりがいや生き甲斐などが醸成されるため注目されている。

④セカンドライフ型ロングステイ

「第二の人生」の活動として、生き甲斐を見出そうとする形態。「計画から実行、帰国後帰宅後の活動において自らが主体となり、参加することで、自己実現につながる」と考える。気候風土の違う土地でのロングステイは、健康維持・促進や技術活用型と同様に、人生における生き甲斐につながるため、多くの効果が期待できる。

⑤日本再発見型ロングステイ

ロングステイを通してその国、その地域の異文化や風習の違いなどに触れることにより、日ごろの価値観や生活習慣の見直しや、自分自身への問いかけ、家族の絆の在り方についての考え方方が深まる。また、異国異地域で暮らしてみて初めて日本の伝統・文化、地元の良さを再認識し、新たな発見もできる。さらに、現地交流を通して相互信頼関係の醸成や人間力を高める効果も、期待できる。

⑥リフレッシュ型ロングステイ

忙しく日常に追われる生活から離れ、異日常環境で日常的な時間に住む生活にて自分と向き合い、自分を冷静に見つめなおすゆとりを与えるステイ。その結果、心身ともにリラックスでき、再び自国自地域において忙しい日々と戦うエネルギーにする、いわゆる欧米型バカンスに近い形態。

⑦季節型・渡り鳥型ロングステイ

避暑・避寒・花粉症などから逃れることを目的とし、その国や地域のよう季節に渡り済むタイプ。日本と海外または地元と地域に二地域居住を繰り返す。

⑧テレワーク型ロングステイ

ICT（情報通信）技術を活用し、仕事と休暇を組み合わせた新しいスタイルのロングステイ。テレワークの活用によって有給取得率の向上など、働き方改革などの推進が期待できる。

これらはあくまでもロングステイの定義があつての選択肢であり、共通の効果・効用として経済的波及効果が追加される。受け入れ先での滞在する生活面にも大きく寄与することが前提であり、短期・周遊型旅行よりも経済波及効果は高く、メリットは大きい。その他、地域交流の活性化、オフシーズン対策、空き家対策、雇用対策等にも通じてくる。

その中でも、根本的に大きく 2 つの分類に分けられて、さらに細分化しているとみている。ひとつは、現地滞在国または地域でしかできないことを体験、体感するものである。これにはキャリアアップ型ロングステイや日本再発見型ロングステイがこれに当たる。実際に現地では精力的に学びや知識をつけるために動くことが求められて、比較的若い年代にみられる滞在型である。もう一方は、日本や地元でできることをあえて海外や地方に出向き環境を変えて体感するものである。これはリフレッシュ型ロングステイや、ファミリー同伴型ロングステイが当たる。日本や地元でできるものをあえて海外や地方を選び、完全な異文化ならではの違いに気づき、それを習得していくものである。これらには滞在先にもよるが、ある程度の予算が必要であり、定年退職した比較的年配者の参加や、経済的に余裕があり中期的に休暇を取得し自分自身を見つめなおす、中高年代の参加が多いものといえる。

以上のことより、ロングステイは滞在スタイルが多様なことから、幅広い選択肢を取ることができるとわかる。その一方でその効果・効用に関し、個人差があつて全員がひとつのロングステイという同一のくくりは難しいといったところも特徴ではあるだろう。

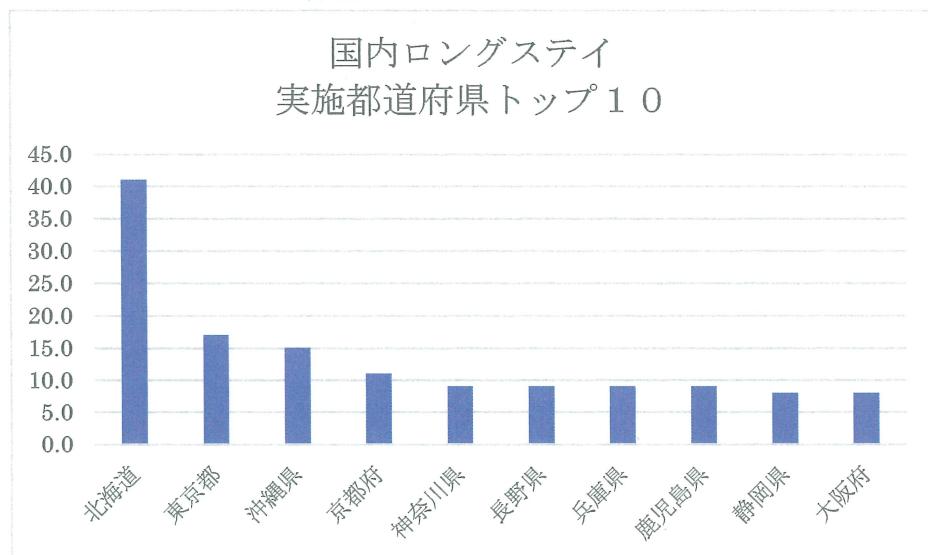
第二章 北海道ロングステイの実際例

本章では実際にロングステイに成功している北海道の都市を事例として、ロングステイが強い都市に関して考察するものである。

2-1 人気ロングステイ先

前章にてロングステイの目的に關し整理したが、国内ロングステイにおいて多くを占める都道府県というのはどこなのであろうか。「全国不特定多数インターネット調査」⁵にて、国内ロングステイ経験者に実際に滞在した都道府県を調査した結果がある。その結果が以下の図表4である。

図表4 国内ロングステイ実施都道府県トップ10



出典：ロングステイ財団「国内ロングステイの実施都道府県調査」をもとに筆者作成

2018年の1位は北海道であり、国内ロングステイの実に40%を占めている。続いて東京都、沖縄県と安定した人気を誇る観光地が人気先である。国内旅行人気先がほぼ比例してロングステイにも人気といえるであろう結果となったが、一方で、なぜ、北海道がこんなにも大きくのびているのだろうか。

1つ、大きい理由として気候が良いというのが挙げられる。日本人ロングステイ者のロングステイ地を選ぶ際の選択基準だが、最も支持されたものは「気候」で、ロングステイをするにあたり北海道が避暑目的であり、苦手な季節から逃れ、行先の良い場所を目的にしているからである⁶。北海道は本州で夏が始まる梅雨の時期は比較的天気が良く、暑さが落ち着く

⁵ 2018年ロングステイ財団が実施

⁶ ロングステイ統計調査 2019

秋の始まりまでは国内でも有数の過ごしやすい気候であり、その点が大きく評価されたのではないか。また、冬は日本屈指のウィンタースポーツができる場所であり、雪質もよく、また、生活における除雪習慣や設備が整っていて生活しやすいというのも挙げられるだろう。つまり、自宅とそれ以外の居住施設をリピートする二地域居住、避暑目的のシーズンステイ、スキースノーボード目的の冬季滞在など、1年を通じてロングステイ希望者が求める形態が形成されているのである。岩井（1998）は北海道における特徴的な観光の一つをグリーンツーリズムと名付け、グリーンツーリズムにおける長期滞在を「多様な考え方に対することが自己研鑽に向けてきわめて有効としている。そしてその中で、多くの人々が自然の美しさを理解してくれることを無上の喜びとしている」⁷と結論付けている。つまり北海道は自然が豊かであり、普段触れ合えない自然を長期滞在することで体感できるのである。それにより北海道はロングステイの成功の1つとなったと言える。ロングステイの効果効用にもある通り、気候や季節というのはロングステイ先を選ぶ重要なポイントなのである。

2-2 行政と民間の共同事業 北海道「ちょっと暮らし」キャンペーン

北海道では、梅雨の時期から暑さが落ち着く秋の始まりにかけて「ちょっと暮らし」施設をかりて、シーズンステイする人が増えている。その先駆けとなったのが、「北海道移住促進協議会」と「NPO 法人住んでみたい北海道推進議会」の行政と民間が共同にて実施した、観光経験からさまざまな滞在経験を経て移住につながることを期待した北海道暮らしのプロモーションである。⁸

図表5 さまざまな北海道暮らしの在り方⁹



出典：北海道への移住・定住を応援する情報サイト より引用

⁷ 岩井（1998）

⁸ 釧路市 市民と協働するまちづくり推進指針とは

<https://www.city.kushiro.lg.jp/machi/kyoudou/machidukuri/0002.html> (20年12月17日アクセス)

⁹ 北海道移住促進協議会/NPO 法人北海道移住促進協議会

<https://www.kuraso-hokkaido.com/experience/shortstay.html>(20年9月16日アクセス)

2005年、北海道への移住促進を目的に「北海道移住促進協議会」が設立された。この協議会は自治体が連携する組織で、当初は14市町村の参加で始まった。現在、道内全179市町村のうち、146市町村が参加する組織¹⁰に拡大している。各市町村に窓口がおかれて、容易に問い合わせや予約ができるようになっている。

両組織が共同運営するポータブルサイト、「北海道で暮らそう¹¹」や、東京、名古屋、大阪で開催される「北海道で暮らしフェア」、北海道生活体験「ちょっと暮らし」は北海道への滞在に向けての総合的な情報を得ることができるイベントとして力を入れている。

北海道においては、本格的に行政と民間がロングステイ、移住、交流促進に取り組み始めて10年以上が経過している。上記の人口は、2006年には417人だったに対し、2015年には2,800人を記録した。この人数は2018年まで年々増加しており、特に6月から9月にかけて「ちょっと暮らし」施設を利用し、国内ロングステイを楽しむ人が増えているのである。

次項では「ちょっと暮らし」施設及びその利用状況について、実態を考察する。

2-3 北海道における「ちょっと暮らし」施設

まず、「ちょっと暮らし」施設というのはどのようなものなのか。北海道移住促進協議会とNPO法人住んでみたい北海道促進会議が共同発行する「北海道で暮らそう！ガイドブック」によると、85の市町村が「ちょっと暮らし」施設の情報を出している。この施設は、道内の市区町村が運営主体となり北海道へのロングステイや二地域居住等の希望者に対して、生活に必要な家具や家電を備え付けた住宅を用意し、生活体験のできるお試し住宅である¹²。具体的には、定住促進住宅、移住体験住宅、お試し暮らし体験住宅、戸建て住宅、教員住宅、研修施設、旅館、コテージ、ロッジ、温泉施設、アパート、マンション、ホテル、ユースホステルなど多種多彩な施設が利用されている。この種類の多さというのが重要なのではないだろうか。浦（2016）は長期滞在における重要性を指摘しており、「長期滞在の場合は、宿泊施設の充実が求められる。理想を言えば、高級ホテル・旅館からリーズナブルなゲストハウスに至るまで多様な形態の施設整備が求められよう。しかし、長期滞在の場合は、手頃な宿泊施設の充実が第一義で、旧来型の貸間旅館タイプではなく、素泊まりタイプ・キッチン付タイプなど、現代的（例えば、小奇麗な）な宿泊形態の必要性を指摘している」¹³と述べている。

ただ、種類が多いことは一丸にメリットとは言い難い。種類が増えすぎることにより、ロングステイ希望者は情報の多さがネックになり、理想とする施設にたどり着けないことが想定される。そんな情報をまとめて情報提供するのが市区町村である。これらの施設を大き

¹⁰ 一般社団法人北海道移住交流促進協議会 団体の概要

¹¹ <https://www.kuraso-hokkaido.com/information/aboutsite.html> (20年9月16日アクセス)

¹² 「北海道で暮らそう！ガイドブック」pp12-14

¹³ 浦（2016）

く分けると、市区町村が運営する手ごろな賃貸物件と民間企業の賃貸物件に分けられる。その、総合問い合わせ先に、市区町村にワンストップ窓口が置かれているのである。

また、申し込んですぐに使える施設（主に民間のホテルが多い）と、一定期間利用者を募集し、抽選にて宿泊者を決める施設（主に行政の管理する施設）の2つに分けられる。これにより、さまざまなニーズに応えられるように行政民間にて担当が変わっている区分わけがされているのであり、連携関係でもある。

2-4 釧路市における受け入れ

ロングステイに積極的に取り組んできた市町村の一つが、釧路市である。夏の釧路市は涼しく、湿原委代表される大自然や、新鮮な海産物があり、生活インフラの整った都市のイメージが定着している。

釧路市の平均滞在日数の推移によると¹⁴、2020年度の1人当たりの平均滞在日数は20.4日になり、年度によってばらつきはあるものの、安定した20日以上の滞在日数がある。

さらに利用件数の推移（図表6）と利用者数の推移（図表7）は2018年には北海道胆振東部地震があつたためか微減しているものの、過去10年間にさかのぼると右肩上がりを遂げている。この件数を見る限り、釧路市は着々とロングステイの定着が浸透しているといえるだろう。

図表6 釧路市ちょっと暮らし 利用件数の推移



出典：北海道への移住・定住を応援する情報サイト より筆者加筆

¹⁴ 注釈11同

図表7 釧路市ちょっと暮らし 利用者数の推移



出典：北海道への移住・定住を応援する情報サイト より筆者加筆

また、釧路市では年々増加する長期滞在者に対しても、市民と同様に「釧路市まちづくり基本構想等策定に向けたアンケート¹⁵」を実施している。目的としてはアンケート名と同じように基本構想等の策定にあたって、市政に対する市民の意見を反映させて市民が主体のまちづくりを発展させるためである。つまり、釧路市は長期滞在者も市民と同様にアンケートを取り、一体となったまちづくりをしているのである。市民と同様に意見を求める姿勢はロングステイにおいて住みやすい環境を整えるためには大事なのではないだろうか。

このような長期滞在者の増加の背景には、行政と民間が一体となった取り組みが見逃せない。実際に釧路市は、不動産会社と主に「長期滞在に伴う住宅情報等研究会」を設立し、のちに「くしろ長期滞在ビジネス研究会（事務局／釧路市総合政策部市民推進課）」となっている。この研究会には、不動産会社やホテル会社をはじめとして、レンタカーカー会社やJR北海道、JTB釧路支店も加盟し、異業種の会社が一体となって加盟しているのである。

釧路市では、まちづくり事業の重要課題に位置付けている。同市のウェブサイトには、同研究会のポータブルサイト¹⁶へのリンクもあり、行政が研究会の事業の支援をしているのである。

同研究官は長期滞在者やそのリピーターの受け入れを重視した継続的な事業を展開しており、

- ・涼しさをアピールした大都市圏でのPR事業の継続的展開
- ・長期滞在者を対象にした滞在生活の充実を図る地域の学習講座の企画

¹⁵ <https://www.city.kushiro.lg.jp/common/000097903.pdf> (20年12月22日)

¹⁶ くしろ長期滞在ビジネス研究会 <https://cool946.com/> (20年9月18日アクセス)

・市民や長期滞在者同士の情報交換の場となる交流事業の企画などが代表的な活動である¹⁷。

さらには同市が発行する長期滞在に関するガイドブックの中には、医療情報、スーパー情報、観光情報、レンタカー情報、防災情報など、ロングステイする人向けた生活に関するものから観光に関するものまで、様々なニーズに対応した情報を発信している。さらにはパソコンを開けば誰もが情報を得られるようになっているのである¹⁸。このような取り組みが滞在者の高い満足度やリピーターにつながっていると考えられる。

釧路市は国内ロングステイの普及を図るうえで、受け入れ態勢の参考になる取り組みであろう。

¹⁷ 注釈 14 同

¹⁸ [https://cool946.com/data/?](https://cool946.com/data/) (20年9月18日アクセス)

第三章 結論と今後のロングステイの考察と取り組むべき課題

ここまで二章を通じて国内ロングステイの定義をとりまとめ、普及に向けて北海道の成功例を把握した。また、長期滞在者が増加している釧路市の受け入れ態勢も把握した。以上のことより以下の点、筆者はロングステイの普及に向けて必要であると考える。

まず、国内ロングステイの普及並びに創出には、手ごろで良質な滞在施設を拡大することが不可欠である。そのためには以下のような枠組みが必要である。

- ①長期滞在者の受け入れ態勢を整える自治体は「くしろ長期滞在ビジネス研究会」のような取り組みを参考にして、同等のロングステイ者に向けた情報発信が必要である
- ②釧路市が釧路市官民一体となって取り組みをしたように「ちょっと暮らし」施設の多様化が必要である。また、受け入れ態勢を整えることである。具体的にはロングステイの期間や目的、滞在場所によってさまざまな仕様施設が選べるようにすることが必要である。
- ③「〇〇で過ごそう」や各人口が多い都市にて行われる「暮らしフェア」、「ちょっと暮らし」などのイベント、ワークショップを数多く開催するべきである
- ④ロングステイの魅力、メリットやできることをさらに発信していくべきである。テレワーク、介護、リモートと変わりつつ現代に対応出来ること、新しい取り組み方ができることを紹介していくべきである

特に筆者が必要と考えるのは②にて記載した、官民一体となった取り組みである。釧路市がJTBをはじめとして民間企業と行政が連携して取り組んだように、実際に受け入れ態勢を整えるためにも行政が軸となり行動していく必要があるだろう。また、住民と同様に長期滞在者も市民の一部としてまちづくりをしていくことも極めて重要だと考える。季節型・渡り鳥型ロングステイは特にその都市が気に入ってくれれば持続的に来訪してもらえる可能性が高い。そのためにも、納得してもらえる取り組みをする必要があるのではないだろうか。

続いて、ロングステイの定義に関してはさらに細分化が必要である。ロングステイには5つの定義と8つの型が存在することが現在の要素ではあるが、筆者はこれが両立していないと感じる。具体的には教育仕事を含めた休暇以外の面である。今現在、型としては存在しているテレワークに関し、定義に関しては休暇を目的としているために当てはまらない。また、高等教育機関においてもオンライン授業、リモート授業と場所を問わずして授業を受ける形も確立しつつある。そこで、6つの定義として、テレワーク等ワーケーションを含めたり、介護や治療をはじめとしたメディカルツーリズムを組み込んだりする休暇だけにとどまらない長期の滞在を作る必要がある。新型コロナウイルスによって働き方学び方も変化し、場所を問わない教育手段仕事手段も見直されている。また、しっかりと定義づけるこ

とにより、さらに具体的なロングステイ推進に向けたアプローチができるのではないか。そしてさらなるターゲットを絞って様々な目的の人に的確なロングステイを提案できるようになるであろう。

【参考文献】

- ・岩井吉粥（1998）「北海道におけるグリーンツーリズム：ヨーロッパとの比較」
- ・浦達雄（2016）「温泉地における長期滞在の問題点と課題」
- ・遠藤正（2017）「世界屈指のパウダースノーによるスポーツツーリズム：北海道ニセコ地域の事例紹介と鉄道による新たな観光への期待」
- ・河原雅子（2010）「タイ・チェンマイにおける日本人ロングステイの適応戦略と現地社会の対応」
- ・黒田明雄（2016）「国内ロングステイの現状と課題・国内長期滞在施設の事例・」
- ・黒田明雄（2017）「北海道 ちょっと暮らしに関する考察」
- ・黒田明雄（2018）「釧路市の長期滞在に関する一考察」
- ・今防人（2008）「フィリピンにおける日本人ロングステイの可能性」
- ・中尾次洋子 林優子（2009）「台湾におけるロングステイへの取り組み」
- ・畠田展行（2013）「北海道における長期滞在観光市場を概観する」

【参考出版】

- ・イカロス出版 『ロングステイ入門ガイド（おすすめ 43 都市をピックアップ！）』
- ・くしろ長期滞在ビジネス研究会 『北海道で暮らそう！ガイドブック』
- ・法務省『2018 年 出入国管理統計』
- ・みずほ総合研究所『キーワードで読み解く地方創生』
- ・米田智彦『行きたい場所で生きる 僕らの時代の移住地図』
- ・ロングステイ財団『ロングステイ統計調査 2019』
- ・ロングステイ財団『ロングステイ統計調査 2018』

【参考ホームページ】

- ・一般社団法人 ロングステイ財団
<http://www.longstay.or.jp/> (20 年 8 月 19 日アクセス)
- ・オリオンツアー 北海道旅行
<https://www.orion-tour.co.jp/air/fair/hokkaido/sp/long-stay/> (20 年 9 月 12 日アクセス)
- ・釧路市 釧路での長期滞在（ちょっと暮らし）
<https://www.city.kushiro.lg.jp/machi/ijyuu/taizai/0003.html> (20 年 9 月 17 日アクセス)
- ・北海道移住促進協議会/NPO 法人北海道移住促進協議会
<https://www.kuraso-hokkaido.com/experience/shortstay.html> (20 年 9 月 16 日アクセス)
- ・北海道ラボ 体験者の声から探る、「釧路で長期滞在生活」の魅力とは?
<https://hokkaido-labo.com/area/kushiro/kushiro-long-stay-life> (20 年 9 月 17 日アクセス)